

## 海を臨む貼石墓

弥生時代、稲作の定着により人々は肥えた土地をもち、多くの食糧・富をもつムラとそうでないムラとで貧富の差が生まれます。ムラのなかでは、ムラ人をまとめる役割の人、ムラとムラをまとめる人が生まれます。そして、ムラ人のなかにムラを代表する者が生まれます。これらの代表者はムラ人の墓とは違った埋葬がおこなわれていたようです。

弥生時代前期には、大陸から方形周溝墓と呼ばれる、溝で区画された墓が伝わります。この方形周溝墓の墓は、弥生時代前期の頃には時として石製の武器が含まれるだけで、墓のなかに特別な遺物(副葬品)は含まれません。中期になると墓の上や溝内および棺のまわりに土器を納めるようになります。時には二重の棺を作り、丁寧に死者を埋葬しています。後期になると棺の中には朱を敷き、多量の玉類を納めるものも見られます。墓の変遷をたどると、弥生人のなかで徐々に格差が顕著になってきたことがわかります。

京都府北部、丹後地域では弥生時代中期（今からおよそ2,100年



石を貼りつけた墓（日吉ヶ丘遺跡：与謝野町教育委員会提供）

程前)の墓がいくつか見つかっています。その墓のなかには方形の区画溝で囲まれたもので、墳丘の斜面に石を貼りつけたはりいしほ貼石墓と呼んでいる墓があります。この方形貼石墓は墳丘の流出を防ぐことを兼ねてか、石で表面を化粧したようです。溝

に囲まれたその中央の平坦面には死者を納めた埋葬施設があります。京都府内ではこれまでに丹後地域及び丹波北部地域だけで見つかっていますので、日本海側の墓の形と思われます。

与謝野町日吉ヶ丘遺跡<sup>ひよしがおか</sup>の貼石墓は長辺 30 m を測り、その中央に棺を埋める墓穴を掘り、木棺を納めていたようです。木の棺は土に還っており、その痕跡だけが確認できました。棺内には多量の朱がまかれ、400 個を超える碧玉製の管玉が見つかりました。死者を送るために多量の玉を用意したことがわかります。

日吉ヶ丘遺跡と同じ時期の方形貼石墓が、宮津市難波野遺跡<sup>なんばの</sup>にあります。難波野遺跡は、日本三景のひとつ天橋立<sup>あまのはしだて</sup>の北側の狭小な平地上にあり、海岸がすぐそばに位置しています。ここでは 2 基の方形貼石墓が見つかり、そのうちの 1 基は一辺が 16 m 程度の大きさで、墳丘の高さは約 0.6 m、東辺では周溝底部からは約 1 m あります。貼石は石の長辺を貼石墓の辺に直交して埋め置いています。貼石に使用されている石は、いずれもやや摩滅した花崗岩<sup>かこうがん</sup>で、難波野遺跡周辺から採取されたものと考えられます。

丹後地域の方形貼石墓によく似た墓ですが、各コーナー部分が張り出した四隅突出型墳丘墓<sup>よすみとつしゅつがたふんきゅうぼ</sup>が中国山地の広島県側や高根県松江市などで見つかっています。弥生時代後期、各地域で地域の特徴が顕著になる時期ですが、日本海地域でも地域ごとに土器の様相・墓の形態が異なっていたようです。

こうした地域ごとのまとまりが、中国の史書が伝える「クニ」なのかもしれません。



(石尾政信)

海沿いに造られた方形貼石墓（難波野遺跡）